

第 165 回東邦医学会例会 予稿集

令和 7 年 2 月 17 日(月)

A. 研修医発表

1. 産後発熱を認め当初乳腺炎が疑われたがその後腎盂腎炎と診断された 1 例

飯田 美里 (研修医)
指導：山田 篤史 (総合診療内科)

今回産褥 2 週間で発熱し当初乳腺炎が疑われたが、その後の精査にて腎盂腎炎と診断された一例を経験した。産褥期発熱患者で乳房の疼痛を認めても腫脹や圧痛がない限り乳腺炎の診断に至らない例や若年女性の腎盂腎炎において背部・側腹部の痛みや排尿障害、頻尿、尿意切迫感といった局所症状を認めない例も一部あるため熱源精査の際にはそのような臨床症状の特徴に注意して診断を行う必要がある。

2. 発熱で来院し身体所見の重要性を再認識した 1 例

山口 咲子 (研修医)
指導：繁田 知之 (総合診療内科)

47 歳の男性。入院 2 日前から悪寒を伴う発熱を認め、倦怠感が強く救急搬送となった。右 CVA 叩打痛が陽性であり造影 CT 検査で右腎臓内に ring enhancement を伴う結節影を認めたことから腎膿瘍の診断となった。入院後はセフトリアキソンの静注で治療を行い全身状態改善後は内服抗菌薬に切り替え膿瘍消失まで治療を継続した。本症例では顔面神経麻痺のためプレドニゾン 15 mg を内服しており膿瘍形成のリスクであったと考えられる。

B. 研修医発表

3. 頻回な下痢症状を呈した原発性副腎皮質機能低下症の 1 例

桃原 彩 (研修医)
指導：繁田 知之 (総合診療内科)

50 代女性。2 年前から頻回の下痢を認めたが原因不明であった。2 ヶ月前から食思不振が出現し入院当日には意識障害を呈した。敗血症性ショックとして抗菌薬とステロイド投与を行い全身状態は改善したがステロイド投与を中止すると下痢症状の再燃を認めた。副腎皮質機能低下症を疑い負荷試験を施行し原発性副腎皮質機能低下症(PAI)の診断に至った。頻回な下痢という非典型的な症状を呈した PAI の 1 例を経験したため報告する。

4. 若年男性に発症した心房粗動から明らかになったサルコイドーシスの一例

眞部 睦紀 (研修医)
指導：菊島 朋生 (循環器内科)

サルコイドーシスは、全身のさまざまな臓器に乾酪壊死を伴わない類上皮細胞肉芽腫を形成する原因不明の疾患として知られている。近年、特に心臓限局性サルコイドーシスが注目を集めており、診断基準の改訂を受けて、さらに関心が高まっている。今回、健康診断で偶然不整脈を指摘され、その後の精密検査を経て心臓限局性サルコイドーシスと診断された貴重な1例を経験したので、ここに報告する。

C. 大学院生研究発表

5. 凍結胚盤胞の融解直後の再拡張率が着床へ及ぼす影響

米山 雅人 (代謝機能制御系産科・婦人科学)
指導教授：片桐 由起子 (産科婦人科学講座)
指定討論者：村上 義孝 教授, 田中 京子 教授, 永尾 光一 教授

本研究は凍結融解後の胚盤胞再拡張率における胚質評価の動的指標としての有用性について検討した。臨床妊娠に対する再拡張率のカットオフ(CF)値を以上を再拡張群、未満を収縮群とした。収縮群、再拡張群、孵化群(凍結融解後の Gardner 分類が 5,6)の ART 成績を比較した。3群の臨床妊娠率は 41.5%/22.7%/41.3%であり、再拡張群、孵化群と収縮群に有意差を認めた ($p<0.01$)。凍結融解後の胚盤胞の再拡張不良が ART 成績へ有意に負の影響を与えることが明らかになった。

D. 柳瀬武司奨学基金受賞講演

6. 電気けいれん療法動物モデルに生じた、脳波平坦化と Cortical Spreading Depression の電気生理学的検証

吉岡 慶太郎 (東邦大学医療センター大森病院麻酔科)

電気けいれん療法 (ECT: Electroconvulsive therapy) は、精神疾患治療で重要な役割を果たしている。ECT 後の脳波平坦化時間は、治療効果に関連する重要な特徴だが、生理学的な機序は不明だ。今回、ラットを用いた ECT 後の生理学的変化を観察する動物モデルを作成し、刺激時間を変化させ膜電位変化、脳波平坦化時間延長の関連を検討した。その結果、脳表を伝播する脱分極波の Cortical Spreading Depression が生じると脳波平坦化時間が延長し、これらは関連していることが示唆された。

E. プロジェクト研究報告

7. 細胞分化を制御するクロマチンリモデリング因子の機能的分子機構の解明

山口 優也 (生理学講座細胞生理学分野)

マクロファージ分化における SWI/SNF 複合体 (クロマチンリモデリング因子) の機能を解明することを目的とした。ヒト急性単球性白血病細胞株 (THP-1) を用い、SWI/SNF 複合体の ATPase 活性を有した因子 BRM/BRG1 の阻害実験を行った。BRM/BRG1 の阻害は形態的なマクロファージ分化に影響を与えないものの、*ITGAM* (CD11b) や *ICAM1* などの分化マーカー遺伝子の発現に影響を与えることが確認された。このことから、SWI/SNF 複合体がマクロファージ分化の遺伝子発現制御に関与することが示唆された。

F. プロジェクト研究報告

8. がん細胞由来細胞外小胞体を標的にした膵がん腫瘍マーカーの開発

梶原 庸司 (消化器センター外科)

膵がんは予後不良であるが診断が困難であり、膵がんを簡便に診断可能な腫瘍マーカーの開発が望まれる。本研究では TSPAN10 EVs を標的にして膵がんの診断を可能にする抗原検査を開発することを目的としている。膵がん患者血清を用いた EVs ELISA による診断精度の検証を行った結果をここに報告する。

令和 7 年 2 月 18 日 (火)

H. 研修医発表

10. 3 歳児健診前に発覚した Spot Vision Screener で検出できなかった内斜視の一例

森 恵子 (研修医)

指導: 松本 直 (眼科)

近年では、三歳児健診に眼位、屈折検査が可能な SVS が導入されている。さらに、小児科、眼科にて三歳児健診前にも SVS を施行される症例が増えている。SVS は小児の視覚スクリーニングに非常に有用であり、偽陽性は少ないとされるが、内斜視が検出できなかった症例を経験したため報告する。症例は 2 歳女児、SVS では異常を指摘されなかったが、眼位異常を訴え受診、診察にて +4.5 の遠視を認め、調節性内斜視の診断となった。

11. 慢性下痢で受診した PBC の既往のある患者の一例

黒澤 佳乃子 (研修医)

指導: 山田 篤史 (総合診療内科)

顕微鏡的大腸炎とは非血性慢性下痢を特徴とする非定型の炎症性腸疾患である。発症危険因子として喫煙、PPI、NSAIDs 等の薬物の内服が知られ、自己免疫性疾患との関連も示唆されている。日本ではガイドラインが確立されず、海外で寛解療法の一次治療となるブデソニドの保険適応もない。十分な生検が行われず、診断、治療介入に至らない症例が多いと推察されるが、比較的有病率が高く慢性下痢の鑑別として重要な疾患であると考えられた。

12. 臀部に生じた Trichoadenoma の一例

藤岡 杏樹 (研修医)
指導：島田 京香 (皮膚科)

52歳男性。左臀部に疼痛のない結節を主訴に受診。下床と可動、被覆表皮は正常でやや弾性のある1cm大の結節を局麻下に全切除した。病理像は表皮と連続しない多くの角質嚢腫よりなる真皮内結節で、嚢腫壁は数層の好酸性有棘細胞で構成され、内腔に向かいケラトヒアリン顆粒を持つ扁平な細胞へ移行し角化していた。また嚢腫間には膠原繊維の増生もみられ、trichoadenomaと診断した。本症は極めて稀な毛包系腫瘍で、その特徴について報告する。

I. 研修医発表

13. 40代女性の高血圧切迫症の1例

磯部 悠 (研修医)
指導：小松 史哉 (総合診療内科)

高血圧緊急症・切迫症は血圧の異常高値だけでなく標的臓器の障害を認めれば致命的になりうる病態である。どのような初期対応で降圧を図っていくかが重要であり、日本では切迫症では内服、注射薬ともに使用可能であり、作用発現が比較的速いCa拮抗薬、ACE阻害薬が推奨される。緊急症ではニカルジピンの注射薬が作用発現が速く使用されている。

14. 腹痛後に結節性紅斑を呈しエルシニア感染症を疑った1例

木村 駿悟 (研修医)
指導：繁田 知之 (総合診療内科)

結節性紅斑は主に下肢の脛骨前面に生じる有痛性紅斑を伴う結節である。本症例は腹痛後に紅斑を呈し皮膚生検にて結節性紅斑と診断された。また、腹痛の診断のために腹部CT、下部消化管内視鏡検査を行い回盲部リンパ節主張、バウヒン弁にびらんを認めエルシニア感染症が疑われた。

J. 大学院生研究発表

15. 初発関節リウマチ患者の血漿メタボローム解析

金地 美和 (生体応答系膠原病内科学)
指導教授：南木 敏宏 (内科学講座膠原病内科学分野)
指定討論者：亀田 秀人 教授, 弘世 貴久 教授, 松田 尚久 教授

関節リウマチ (RA) の病態解明を目的とし、初発未治療の RA 患者及び健常者の血漿代謝物を網羅的に解析した。RA 群では健常者に比し carnosine をはじめとする 9 個の代謝物の増加がみられ、RA 群のメトトレキサート治療反応群は非反応群に比べて asymmetric dimethylarginine の有意な上昇を認めた。血漿代謝物が RA 病態に関与し、治療予測に役立つ可能性がある。

K. 大学院生研究発表

16. **TFAM deficient mice spontaneously develop inflammation and autoantibodies (No.23-13)**

眞下 修平 (生体応答系皮膚科学)

指導教授：石河 晃 (皮膚科学講座)

指定討論者：亀田 秀人 教授, 樋口 哲也 教授, 南木 敏宏 教授

ミトコンドリア (Mt) タンパク質 TFAM は Mt 活性を通して T 細胞の機能を調節すると考えられている。T 細胞における TFAM の役割について T 細胞特異的 TFAM 欠損マウスを用いて解析した。TFAM 欠損 T 細胞では細胞質中に Mt DNA が漏出し、これが細胞質核酸認識系を刺激した。また、系の活性により I 型インターフェロンの発現が誘導されていた。さらに血清抗 DNA 抗体の上昇を認めた。現在病態について検討している。

L. プロジェクト研究報告

17. **SGLT2 阻害薬の心房細動への適応拡大を目指した橋渡し研究**

神林 隆一 (薬理学講座)

心不全を合併する心房細動 (AF) の新たな薬物治療戦略としての SGLT2 阻害薬の有用性を検討するため、その代表薬 empagliflozin の抗 AF 効果を心不全の病態を呈する発作性 AF モデルを用いて評価した。Empagliflozin は用量依存的に AF の持続時間を短縮させ、頻度依存的に心房間伝導を抑制する傾向が認められたことから、クラス I 群薬に類似した電気生理学的作用を有する可能性が示された。

18. **生細胞イメージングによるインターロイキン 33 の細胞外分泌機構の解明**

鹿子木 拓海 (内科学講座呼吸器内科学分野(大森))

インターロイキン-33 (IL-33) はアレルギーや敗血症などの疾患に関与するサイトカインで、細胞死に伴い放出される一方、生細胞からの放出も報告されている。しかし、IL-33 の細胞外への放出機構の詳細は依然として不明である。そこで本研究では、最先端の生細胞イメージング技術である LCI-S を用い、従来の手法では捉えきれなかった単一細胞レベルにおける IL-33 の細胞外放出プロセスを解析した。

N. 柴田洋子奨学助成金受賞講演

20. **Significance of Systemic Scleroderma-Specific Autoantibodies in Idiopathic Interstitial Pneumonia**

村上 悠 (佐倉病院呼吸器内科)

特発性間質性肺炎 (IIP) 患者において全身性強皮症特異的自己抗体 (SSc-Ab) が陽性となっても全身性強皮症 (SSc) の診断基準を満たさないことはしばしばある。今回、我々は IIP における SSc-Ab の各サブタイプと臨床的背景、予後、急性増悪 (AE) との関連を検討した。解析の結果、SSc-Ab の有無により生存期間および AE 発生率に有意差は認めなかった。また SSc-Ab のうち抗 fibrillarin 抗体が有意な AE のリスク因子である可能性が示された。

O. 一般演題発表

21. 大腿骨頸部骨折した高齢者に急激な低ナトリウム血症を認めた一症例

岩本 津和 (麻酔科)

87歳女性。大腿骨頸部骨折で観血的修復術が予定されたが、手術当日に顕著な低ナトリウム血症、高カリウム血症、徐脈、応答反応低下を認め手術中止となった。帰室後 hidrocolch 100 mg の投与により速やかに症状回復し、後日手術施行され退院した。高齢者に外的ストレスが加わると急性の低ナトリウム血症を呈することがある。診断や治療について文献的考察を加えて報告する。

22. 当院 MRONJ 外来の現状と MRONJ の管理について

兼古 晃輔 (口腔外科)

ビスホスホネート製剤や抗 RANKL モノクローナル抗体製剤などによる骨吸収抑制薬関連顎骨壊死 (MRONJ) は年々増加しており、当科 MRONJ 外来でも多数の患者を受け入れている。2017 年～2023 年までに当科初診で MRONJ と診断した 188 例のうち、62 例に外科的治療、126 例に保存的治療を実施した。今回、MRONJ 外来の現状と MRONJ の管理について報告する。

令和 7 年 2 月 19 日 (水)

P. プロジェクト研究報告

23. 三次元 MRA 解析による分枝粥腫病発症リスクの定量化

長澤 潤平 (内科学講座神経内科学分野)

分岐粥腫病 (BAD) は穿通枝が入口部近傍のプラークにより閉塞する脳梗塞の一病型だが、同部位に限局してプラークが形成される機序は不明である。我々は血管の屈曲の違いにより shear stress が作用する部位が異なり、プラークが形成される部位に影響すると仮説を立て、MRA で中大脳動脈 (MCA) を評価。穿通枝入口部にかかる shear stress の弱い下凸型 MCA で BAD が発症しやすいという結果を得た。

T. プロジェクト研究報告

27. 間質性腎炎モデルとして有用な新規シェーグレンモデルマウスを用いた治療標的の検討

増岡 正太郎 (横須賀市立うわまち病院)

外分泌腺炎を自然発症する SATB1^{f1/f1}Vav-Cre⁺マウスはシェーグレン症候群 (SS) モデルとして使用される。本研究では、このマウスが外分泌腺炎発症後の 9 週齢以降に腎間質に CD4⁺T 細胞を中心に、更に B 細胞、形質細胞、マクロファージの浸潤を特徴とする尿細管間質性腎炎 (TIN) を発症することを示した。以上から、本マウスは腺外病変の TIN を合併する SS モデルとして有用であると考えられた。

28. 関節リウマチ患者の気道細菌叢に関する研究 (採択番号 23-14 号)

小柴 慶子 (膠原病科)

我々はこれまでのプロジェクト研究で、RA 患者の口腔咽頭細菌叢では、健常者に比較してβ多様性が異なり、歯周病などに関連する *Prevotella* 属や *TM7*門の細菌の割合が上昇していることを報告した。今回、細菌叢の遺伝子情報解析をさらに実施し、RA 群では細菌鞭毛形成に関連する遺伝子の上昇、および抗酸化作用を持つ glutathione 生合成に関連する遺伝子の低下が見られることが明らかになった。以上から、これらの細菌叢の機能が RA の病態と関連する可能性が示唆された。

U. 大学院生研究発表

29. *Corynebacterium* 感染症の臨床像と微生物学的・遺伝学的特徴に関する単施設研究

湯川 堅也 (生体応答系微生物・感染制御学)

指導教授：舘田 一博 (微生物・感染症学講座感染病態・治療学分野)

指定討論者：清水 直美 教授, 松瀬 厚人 教授, 近藤 元就 教授

Corynebacterium striatum は多数の抗菌薬に耐性を示し、近年感染症の起因菌としての報告が増加している。今回、単施設で *C. striatum* 感染症症例 52 例を集積し、その臨床的特徴と菌株の遺伝学的性質を解析した。臨床的には頭頸部領域の手術部位感染症、腹腔内感染症、尿路感染症が多いことが確認され、菌株の全ゲノム解析では病棟を超えた院内伝播が生じていることが示唆された。

30. 閉塞性大腸癌における金属ステントの留置期間による病理組織学的所見の差異に関する検討

園部 聡 (生体応答系病理学)

指導教授：三上 哲夫 (病理学講座)

指定討論者：栃木 直文 教授, 船橋 公彦 教授, 本間 尚子 教授

閉塞性大腸癌に対しては、根治術に先立ち減圧術が施行されることが多いが、それに伴う臨床病理学的所見については、いまだ整理できていない状況である。今回、一期的に大腸ステント留置が施行された閉塞性大腸癌症例のうち、Stage II、III の 45 例を対象に、ステント留置期間が 24 日未満と 24 日以上との 2 群に関して、病理組織学的な特徴を後ろ向きに比較したところ、前者においてリンパ管侵襲が有意に多かった。